

『古筆名葉集』記事内容考

田中 登

古筆名葉集とは、古筆切の収集愛好家のために、伝称筆者別に優秀な古筆切を取り上げ、その切名の下に書写内容、書式、料紙の特徴などを簡潔に記した小冊子である。かかる書物が江戸時代に刊行され、版を重ねてきたこと自体、往時いかに古筆愛好熱が高かったかを証して余りあるものといえようが、その記事内容、とりわけ書写内容についての説明には、昨今の学問的水準に照らし合わせて、若干の訂正が必要かと思われる。

そこで以下、本稿では、近年の諸家の研究成果に支えられながら、古筆名葉集の問題となりそうな記事を拾い、その内容について検討を加えてみることにしたい。

なお、掲出の順序並びに記事内容については、安政版の新撰古筆名葉集に拠ることとし、必要に応じて文化版の古筆名葉集や田中堯堂編の昭和古筆名葉集をも参照することにする。

後宇多院の項の筆頭に「松木切 率書紙御自詠歌一行書片カナニテ題アリ」という記事が見られる。これによれば松木切は後宇多院の御集ということになるが、現存の遺品についてみるに、院の詠と確認できるものはなく、「藻塩草」のは兼行集、白鶴美術館の「一筆¹⁾」のは為子集となつてゐるなど、名葉集の記述との間に齟齬が見られる。が、近年諸家に蔵されている松木切を精査された別府節子氏は、松木切には兼行集、為子集の他に伏見院の詠も見られ、かつこの三名とは別に初期京極派の某歌人の歌も含まれている可能性を明らかにされた。また、その筆跡も、松木切は寄合書きで、その内「藻塩草」の切と同一グループの筆者については、広沢切との比較から、伏見院であることを特定されたのは、まことに大きな収穫であつたといえよう。

一方、松木切の書写形式については、一首一行書きの切と二行書きの切があることから、これまで同一人物が同じ兼行集を二度書写したものと考えられてきたが、「桃花水」所収の切を精査された石澤一志氏は、該断簡に見られる兼行集の三首の歌の内、前の二首が二行書きであるにもかかわらず、最後の一首が一行書きとなっている点に着目し、松木切は二行書きから一行書きへと途中で書写形式が改められたものであることを明らかにされ、さらに他の切に見られる傍書や見せ消ちによる本文訂正のあり方などからして、松木切が極めて稿本的性格の強い資料であることを併せ指摘されたのは、貴重な成果であつたと評せよう。

ただ、一つ気になるのは、現存松木切の中に、名葉集のいう「片カナニテ題アリ」という実例が見出せないことであるが、これも昭和古筆名葉集が前引した新撰古筆名葉集の記述の後に「高一尺余小字題漢字書ノトコロモアリ」と記しているように、題は歌によつて漢字の所もあれば、平仮名、片仮名の所もあつたと解すれば、矛盾も解消しよう。

二

後醍醐天皇の項の筆頭に「吉野切 中四半形恋述懐御自詠古歌文一首チラシ書」という記述がある。これによれば、吉野切の歌は

基本的に後醍醐天皇の詠であり、中に古歌も交つていふことになるが、「翰墨城」「見ぬ世の友」以下に見出される数多くの吉野切についてみるに、天皇の詠と確認できるものは一首もなく、それどころか堀河百首の歌が散見する。このことから、吉野切を集成し、その内容に検討を加えた伊井春樹氏は、複雑な成立過程が想定される堀河百首の初撰本として吉野切を位置づけられた。また、吉野切が恋の歌ばかりから成つていふことに基いて小松茂美氏は、和歌現在書目録にその名が見える恋部集なる私撰集に注目し、この吉野切こそ初撰本堀河百首の恋部を類聚して成つた恋部集そのものではないのか、という見解を提出されたのである。

このように、吉野切に対する両氏の考えにはまことに興味深いものがあるが、ただそのまま肯定するには、まだ若干の問題が残されているように思われる。まず第一に名葉集がその内容を「歌恋述懐」と述べているように、吉野切をすべて恋の歌と解釈してよいかどうかということ。これは伊井氏自身も指摘されていることだが、「呉文炳蒐集手跡目録」に見える「よしのやまわかすむかたはきりこめよふもとのなははるにあふとも」などは、述懐歌かどうかはともかく、恋歌するにはやはり躊躇されるものであろう。それから、これは小松氏が触れていることだが、「古筆学大成」所収の一首「わすればやかせはむかしのあきのつゆありしにもにぬ人のおもかけ」

が、第五句に小異はあるものの、順徳院の紫禁和歌草に「わすれはや風はむかしの秋の露ありしにも似ぬ人の心に」として載ることが問題となろう。この歌はもとと建保二年（一二二四）八月の歌合において「秋恋」題で詠まれたもの。そこで小松氏は、これを古歌による順徳院の本歌取りと解釈されたのであるが、本歌取りとするにはこの両首あまりにも似すぎていよう。本歌取りというなら、むしろ新古今集所載歌の小町歌「ふきむすぶ風はむかしの秋ながらありしにもむ袖の露かな」を本歌として指摘すべきかと思われる。

その意味で吉野切の「わすれはや」の詠はやはり順徳院の作とみるほかなからう。そうなると吉野切には、堀河百首の歌と順徳院の歌といった具合に、明らかに時代の異なる歌人たちの詠作が混在していることになるわけで、ここで改めて思い出されるのが、名葉集のいう「古歌交り」という記述である。名葉集は吉野切を基本的には後醍醐の詠とみていたのであるが、この後醍醐の代わりに順徳を置いてみれば、名葉集の記述は正しかったことになる。だがそう判断するには、さらに多くの順徳院歌を吉野切の中に見出してゆく必要がある。今後吉野切のさらなる出現が期待される所以である。

三

光厳院の項の筆頭に「六条切 四半雲紙続古今ノ異本歟未詳」と

いう記述があるが、実際、「翰墨城」「見ぬ世の友」など、この六条切を収める各種複製手鑑類の解説はいずれも不明歌集として扱っている。名葉集が「未詳」としながらも、わざわざ「続古今ノ異本歟」としているのは、「見ぬ世の友」や「世々の友」の切のごとく、そこに続古今集との共通歌が見出されるからであろうが、しかし、一方「文彩帖」や「翰墨城」の切には新古今歌も交じっており、六条切はとてども続古今集の異本として位置づけられるようなものではない。

近年、この六条切を集成し、その内容について検討を加えた池尾和也氏は、同じく不明歌集とされている伝光明院筆天龍寺切や伝後光厳院筆兵庫切との料紙、書写年代、書写内容との類似性から、これら三種の古筆切を各々筆跡が異なるものの、同一典籍から切出されたツレの断簡とみ、その上「古筆学大成」第十六巻に収められている伝明融筆の八代和歌抄切が実は後光厳の兵庫切そのものであることを指摘され、その結果、六条切、天龍寺切をもすべて今は佚して伝わらない真観撰の八代和歌抄の切であると結論づけられた。

「見ぬ世の友」所収の兵庫切の実体を八代和歌抄と突き止められたのは、池尾論文の大きな成果といえようが、ただ、筆跡の異なる六条切、天龍寺切をも同じく八代和歌抄の切とするのは、現状ではなお一抹の不安がないわけではない。できうれば、六条切、天龍寺

切ともに巻頭の集名・部類名を備えた切を見付け出したものである。

四

同じく光厳院の項の四番目に「同（四半）撰集ノ歌又キ番二行カキ」という記述がある。従来これに該当する切を複製手鑑類の中に見出すことができずにいたが、藤井隆氏蔵の光厳院を伝称筆者に持つ式子内親王集の断簡を図版入りで紹介した際、稿者はこの切が名葉集の右の記述に該当するのではなからうかということを書いておいた。当該断簡はもと四半形の冊子本で歌は一首二行書き。一面七行詰め。式子内親王集の内、正治百首の春の歌が四首並んでいる部分だが、各歌頭には「勅」「統古」「風」「統後」と集付が施されている。周知のように式子内親王集とりわけ正治百首の部からは数多くの歌が勅撰集に採られており、それが右に述べたごとく集付という形で記されていたとすれば、名葉集の編者がその断簡を見て「撰集ノ歌又キ番」と判断しても何ら不思議ではない。なお、ツレの切が一葉出光美術館に蔵されていることを付け加えておく。

五

宗尊親王の項の第七番目に「同（巻物切）拾遺歌二行書貫之二

似タリ」という記述がある。だが、現実には宗尊親王を伝称筆者とする拾遺抄ないしは拾遺集の断簡は見当たらず、これはおそらく小松茂美氏も指摘されているように如意宝集のことを指しているのであらう。周知のように、如意宝集は藤原公任の撰かといわれており、これが拾遺抄を経てさらには拾遺集へと発展してゆくことになる。したがって、如意宝集と拾遺抄・集との間には共通歌も多く、名葉集の編者が如意宝集の切を見て拾遺抄・集のそれかと見誤ったとしても、無理からぬことといえよう。

では、名葉集に「巻物切」とか「貫之二似タリ」とある点についてはどうか。現存の如意宝集はもと四半形の冊子本であったかと思われるが、縦の寸法が二五センチにも及んでおり、これは通常の四半本よりやや大きめの、いわば大四半本とも称すべきもので、それが切断されると、ややもすれば卷子本を切ったものと見られがちなことは、まま例のあるところである。また、如意宝集切の筆跡は典雅な高野切古今集第二種の書風を継承するといわれているが、その高野切は古筆の世界では紀貫之の筆とするのが古来からの習わし。さすれば、名葉集の編者が「貫之二似タリ」と評するのも不思議ではない。

なお、昭和古筆名葉集は、前引新撰古筆名葉集の記述を受けて「同（拾遺集切）拾遺集歌二行書貫之二似タリ堅八寸二分」とし

た上で、それとは全く別に「如意宝集切 歌二行書巻物切墨流アリ 高八寸一分」というのを新たに付加している。これによれば田中塊堂氏は如意宝集切とは別に宗尊親王の拾遺集の巻物切というものの存在を認めていたことになるが、果たしていかがなものであろう。

六

邦君親王の項の筆頭に「桂切 巻物歌二行書彈正親王ト名人ノ処御自詠ナリ」という記述があるが、これに該当する切が「見ぬ世の友」に収められており、そこでは松梅院切なる名称が付されている。桂切といえは、伝後伏見天皇筆の風葉集切、伝後京極良経筆の新古今集切がやはり同じ名称なので、この伝邦君親王筆切については、松梅院切と呼んでおくのが混乱もなく便利であろう。

切名の問題はさておき、この「見ぬ世の友」の断簡は、近年「新編国歌大観」にも収められた北野宝前和歌の夏部の冒頭部と完全に一致するところから、松梅院切は北野宝前和歌を写したものであることが明らかとなったが、ここでさらに注意すべきは、「藻塩草」「翰墨城」などの断簡によって、従来夏部の五十首しかその存在が報告されていなかった北野宝前和歌の散佚部の歌が断片的ながら知られるようになったことであろう。¹¹⁾

また、その筆者について考えてみるに、北野宝前和歌の成立した

元徳二年（一三三〇）の時点では、名葉集のいう「入道彈正親王」は、後二条天皇皇子の邦君親王などではなく、順徳天皇曾孫の忠房親王であることから、この松梅院切は北野宝前和歌の作者の一人である忠房親王の自筆浄書本の可能性が極めて高いものといえよう。¹²⁾

なお、この松梅院切について「見ぬ世の友」「藻塩草」「翰墨城」では筆者を邦君親王としているが、「玉海」「あけほの」「筆陳」などでは慶運となっているので、その点注意が必要である。

七

法守法親王の項の筆頭に「仏餉切 六半行書カナ交リチラシ書」という記述がある。この仏餉切は国宝級の手鑑に見えず一般には馴染みの薄いものであるが、これに該当すると思われる藤井隆氏蔵の切をかつて「国文学古筆切入門」¹³⁾に図版入りで紹介した際、その出典を明らかにしえず、単に仏教歌謡としたに留まったが、右の本とほぼ時を同じくして刊行された細川家永青文庫の手鑑「墨叢」¹⁴⁾にもツレの切が収められており、そこでもこの仏餉切については和讃切とするのみで、やはり特定の文献を明示するには至らなかった。

ところが、平成に入って三井文庫の手鑑「たかまつ帖」¹⁵⁾の複製が出版されるに及び、同書の解説で落合博志氏は、そこに収められている仏餉切の出典を八相和讃の一節と特定、併せて藤井氏蔵の切に

ついても、それが涅槃和讃の一節であることを指摘され、この二葉が時宗系の金蓮寺本和讃集と本文的に完全に一致することを明らかにされたのである。なお、小野恭靖氏¹⁶もその後右三葉の他にさらに二葉を加え、この仏誦切についての基礎的考察を行っていることを付け加えておく。

八

国宝手鑑に揃って見える二条良基の畠山切について新撰古筆名葉集は「巻物切雲紙上下金卦真字五山僧ノ詩歌ニ行番歌ハ今川了俊ノ筆ナリ詩歌両筆ノ処モアリ」と述べている。そこで今川了俊の項に目を転じてみると、「畠山切 巻物雲紙上下金卦歌ニ行番真字五山僧ノ詩ハ二条良基公ノ筆ナリ詩歌両筆ノ処モアリ」とあって、良基の畠山切とはほぼ同内容の記述が見出される。即ち名葉集に拠れば、畠山切には詩と歌の部分があり、詩は二条良基の、歌は今川了俊の筆になるもの、ということになろう。これを現存する遺品についてみるに、「見ぬ世の友」「藻塩草」「大手鑑」の切は詩のみ、「翰墨城」のは一葉が詩のみで、今一葉が歌のみ、「あけほの」のは詩と歌との両方¹⁷といった次第だが、諸解説いずれもその出典を明らかにしえないできた。

ところが、「たかまつ帖」¹⁸の解説で堀川貞司氏は、この畠山切の

書写内容を大慈八景詩歌である旨明らかにされた。大慈八景詩歌は康暦三年（一三八〇）今川了俊の発案で日向国志布志にある大慈寺の八景を京都の五山僧や公武の歌人が詩歌に詠んだもの。従来その詩は雲集集によって知られていたが、和歌は早くに散佚してしまっていただけに、この指摘は極めて貴重なものといえよう。¹⁹

九

花山院師賢の項の二番目に「巻物切 大四半形杉原紙歌一行番集未詳」という記述があり、「見ぬ世の友」ではこれに該当すると思われる切に佐々木切という名称を付している。ツレの断簡は「翰墨城」「あけほの」などにも見られるが、諸解説いずれも未詳歌集として扱っている。

ところで、古今から統後拾遺までの十六の勅撰集から秀歌を選んで成ったものに二八要抄という歌集がある。同集は今日完本がなく伝本としては統群書類従本と尊経閣本との二本を数えるのみ。統群書類従本は恋一〜八までの零本で、巻末には「右件之本者尹大納言師賢卿真筆以書写畢」という奥書を持つ。一方、尊経閣本は筆者を師賢と伝える鎌倉末期の卷子本で、これが統群書類従本の親本かと推測されるのだが、現存するのは恋一〜三までにすぎない。

しかし、書写内容の類似と伝称筆者の同一性に注目した稿者は、²⁰尊

経閣本を具に調査し、それが佐々木切のツレの残巻であることを確認して、ここに佐々木切の実体が二八要抄の断簡であることを明らかにしたのである。

その後、佐々木切は続群書類従本と重なる部分の断簡も続々と発見され、「古筆学大成」でも二八要抄として収録しているが、注意すべきはその筆者で、師賢の署名入り懐紙や短冊などと比べて、この佐々木切は伝称どおり師賢の書写になると判断されることである。これにより従来必ずしも明らかでなかった二八要抄の成立時期も、上限は続後拾遺の成立した嘉暦元年（一二三六）六月、下限は師賢の没した元弘二年（一二三二）十月と、かなり絞って考えてみるこ

一〇

世尊寺経朝の項の五番目に「同（大四半） 拾玉歌二行書」という記事が見えるが、著名手鑑にはこれに該当する切が見出されない。世に初めてこの切を紹介されたのは藤井隆氏である。氏は御所蔵の断簡が鎌倉初々中期の書写であつて、尊田親王により編まれた拾玉集より作品の成立が時代的に先行すること、また断簡中に見られる歌の配列が拾玉集とは全く異なること、などを指摘されたのであつた。

その後、ツレの断簡を二葉入手した稿者は、この伝経朝筆切の特質を、全体の組織が歌の内容によつて部類されていること、拾玉集に見えない歌を持つていること、所収歌はほぼ建久年間頃までの詠であること、とした上で、拾玉集に先行する慈円の家集で、現在一二〇首という残欠本の形でしか伝えられていない無名和歌集との類似性を明らかにした。同種の断簡はその後も続々と発見され、これまで六葉を数えるに至つたが、いまだ無名和歌集と内容的に相重なる切は発見されていない。

一一

平葉兼の項の筆頭に「春日切 花山院御集力未詳歌三行書白卦アリ」という記述がある。花山院御集がかつて存在したことは大鏡や夫木抄によつて明らかだが散佚してしまい、現在春日切をしかと花山院御集だと断定できる根拠はなかなか見当たらない。ただ、「見ぬ世の友」の切の二首目「ひとりぬる」の歌が新古今集巻十六に花山院の作として載ることから、春日切が名葉集のいうごとく花山院御集の可能性もあろうかと、かつては漠然とながら考えられていた。ところが、近年春日切を精力的に調査された久保木哲夫氏によつて、春日切の一部は完全に師輔集と一致すること、さらに師輔集以外の断簡については、花山院御集と清慎公（実頼）集とが含まれて

いる可能性が極めて高いこと、などが明らかにされた。つまり春日切は一歌人の家集を書写したのではなく、複数の私家集を書写したものだつたのである。その意味では、今後さらに別な歌人の家集も発見される可能性もあろう。

なお、書陵部本清慎公集の奥書に「校合了 従三位行治部卿平朝臣業兼」とあることから、業兼は春日切の筆者ではなく、校合者にすぎなかったことも、併せて久保木氏により指摘されていることを付け加えておこう。

一一一

顯昭の項の四番目に「同（四半） 集未詳歌二行書」という記述があり、これに該当すると思われる切が「大手鑑」や「文彩帖」に見えながら、長らくその出典は明らかにされずにきた。しかし、「碧玉」「文彩帖」「たかまつ帖」所収断簡の歌が新統古今集や題林愚抄に「伏見院三十首」の歌として載るところから、これを今は佚して伝わらない嘉元元年（一二三〇）成立の伏見院三十首の切と最初に認められたのは、岩佐美代子氏である。この伏見院三十首はそれまで三村晃功氏により後代の類題集などから佚文が集成され、利用されていたものだけに、作品の成立時期に極めて近い頃の書写になる断簡の存在が明らかになったことの意義は、まことに大きいも

のがあるといえよう。なお、この伝顯昭筆切については、その後別府節子氏による集成と考察があることを付け加えておく。

一一二

兼空の項の第二番目に「四半 集未詳歌二行書続千載ノ異本歟」という記述があり、「見ぬ世の友」ではこれに該当すると思われる切に下田屋切という名称を付している。しかして、この下田屋切の書写内容については、早くに久曾神昇氏が松花和歌集である旨指摘されている。松花集は淨弁の撰かといわれ、今日完本が伝わらず、零本や断簡類（下田屋切の他に淨弁筆巻物切、伝正広筆四半切あり）によつて部分的にその内容が知られているにすぎないものゆえ、今後、さらなる断簡の出現が期待されよう。なお、この松花集は「新編国歌大観」第六卷に断簡を含めて本文の集成がなされている。

一一三

二条為道の項の最後に「同（六半） 公卿ノ詩集作者名アリ」という記述がある。既刊の複製手鑑類にはこれに該当する切を見出しえないが、稿者の手許にはあるいは右名葉集の記述に相当するかとも思われる切が一葉存する。即ち、菅原道真の和歌一首と次いで源通具、藤原頼範、藤原俊憲の漢詩各一首が並ぶ断簡で、和歌は一首

を二行書き、漢時は七言二句を一行書きとし、一面に九行を書いたもの。現存作品にこれと同内容のものを見付けることはできないが、これは多分御所本和漢兼作集の今は佚して伝わらない後半部分かと推測される。名葉集が「公卿ノ詩集」と記したのは、おそらくその編者がたまたま漢詩ばかりが並ぶ断簡を見ていたからであろう。

なお、ツレの断簡を最近小林強氏³²が一葉紹介されている。それは氏御所蔵の和歌ばかりが三首並んだ切で、氏はこれを「中世未詳私撰集切」と極めて慎重な態度を持しつつ、一方で御所本和漢兼作集の後半部の断簡である可能性をも示唆されたのは、まことに鋭い指摘であつたといえよう。

一五

二条為宗の項の筆頭に「四半 集未詳歌二行哲作者名歌ノ下二アリ」という記述が見られ、これに該当すると思われる切が『集古帖』と稿者の手許に各一葉ある。しかして、『集古帖』のものには二首の歌が並んでいるが、一首目の「みなとかは」の詠が抜粋本現存和歌六帖の第三帖の「やな」題の下に載り、かつ二首目の「みくつせ」の歌が同書には見出されないもの、やはり「やな」を詠んだ歌であるところから、これは完本系現存和歌六帖第三帖の「やな」の部分の断簡とみることができよう。一方、稿者蔵の切も二首の歌

が並んでいるが、二首ともに「みづ」を詠んだ歌なので、同じく第三帖冒頭の「みづ」題に属する断簡と推定されるのである。³³

なお、現存和歌六帖の完本系統は従来第六帖しかその存在が知られていなかったが、近年京都冷泉家の秘庫から第二帖の前半部と後半部とが相継いで発見され、³⁴ 徐々にではあるがその実体が明らかにされつつあるのは、まことに喜ばしいかぎりである。

一六

二条為明の項の二番目に厩切というのが挙げられ、「集未詳四半 杉原紙曆ノ如キ出来故二名トス」とある。この「曆ノ如キ出来」とはいったいどのような状態をいうのか、これに該当する切が国宝級の手鑑にないので、従来その実態がよく分からなかったのであるが、文化版の古筆名葉集には、実は今少し手掛りとなるような説明が見られる。即ち、「厩切 杉原紙細字上二集ノ名中二歌下二作者ノ名ヲ書」とある。料紙の上方に歌集名が記され、中ほどに歌が、そして下方にその作者名が記されているというわけであるが、こうした書式上の特色を備えた断簡はたしかに存する。かつて杉谷寿郎氏³⁵が「撰句抄切」なる名称で紹介された切がそれで、料紙の上方には歌の出典を示す勅撰集の略称とその巻序が、下方には作者名が記されており、これが新撰古筆名葉集のいう「曆ノ如キ出来」であると了

解されるのである。

この歴切は「文彩帖」「あけほの」などに見えるが、これは撰集佳句部類の今は佚して伝わらない天象部の断簡と推定されるものだけに、今後さらなるツレの出現が期待されよう。

一七

二条為遠の項の五番目に「同（四半） 集末詳歌二行書」という

記述があるが、これがかつて久曾神昇氏³⁷が紹介された松吟和歌集のことであろう。該断簡は歌一首二行書き、一面九ないし十行詰め、

「松吟和歌集卷第六 冬歌」という集名・部類名を備えた切もあるという。氏の紹介文には図版もなく、また「古筆学大成」もこの松吟集を扱ってはいないので推測の域を出ないが、「世々の友」の伝二条為遠筆歌集切というのがおそらくこれに該当しよう。なお、このツレの断簡が一葉池田和臣氏³⁸によっても紹介されている。

一八

二条為右の項の五番目に「同（四半） 集末詳歌二行書ウタノ首

二集ノ名アリ」という記述があるが、これは二八明題集のことと思われる。二八明題集は古今から統後拾遺までの十六の勅撰集より歌を抜き題を設けて分類した、いわゆる類題和歌集の一つ。もとは大

部なものだけに、この伝為右筆切もかなり伝存しているようである。料紙はそのほとんどが素紙だが、中に「鳳凰台」や「聯珠草林」所収切のように雲紙のものも交じっているので注意を要する。二八明題集は元來勅撰集を素材とする二次的私撰集ゆえ、本文的には格別取り立てていうほどのこともないが、ただ同集の成立を考える上で、この伝為右筆切の果たしてくれる役割には重要なものがあるといえよう。³⁹

一九

覚源の項の四番目に「同（四半） 続古今異本歌二行書」という

記述が見られるが、これは高田信敬氏⁴⁰も指摘されたように雲葉和歌集のことであろう。雲葉集は藤原基家の撰になるものだが、同じ基家が撰者として加わっている続古今集との間には重複歌も多く、名葉集の編者が「続古今異本」と考えたのも不思議ではなからう。現在完本が伝わらない雲葉集だけに、今後その散佚部の断簡の出現が切に望まれるところである。

なお、この伝覚源筆切をも含め雲葉集の古筆切の集成を伊井春樹氏⁴¹が試みられているが、池田和臣氏⁴²によっても一葉報告されていることを付け加えておく。

源承の項の筆頭に笠間切というのが挙げられ、その説明に「集未詳四半歌二行巻後撰ノ異本力」とあるが、これが久曾神昇氏^註が早くに指摘された浜木綿和歌集のことである。浜木綿集は正応年間（一二八八―九三）に源承が撰した私撰集で散佚したと思われるのだが、「浜木綿和歌集巻第九 釈教歌」という集名・部類名を備えた断簡が前記久曾神氏によつて紹介され、一躍注目されることとなつた。これにより「藻塩草」所収の切も初めて浜木綿集を写したものであることが知られるに至つたのである。この笠間切はその後も諸家による報告が相繼いでおり、今後もさらに新しい切の出現が期待されよう。

以上、本稿では昨今の研究情況に鑑み、古筆名葉集の記事内容、とりわけ切の書写内容についていくつか訂正を施してきた。またこの他にも名葉集の記述に対して訂正の必要を感じている箇所がないわけではないが、記事内容が簡略にすぎたり、それに対応する遺品の数があまりにも少なかつたりして、恣意的になりすぎる恐れがあるものについては、これを省略した。また、書誌的な事項についても同様な作業が行われなければならないと考えるが、それは今後の

課題としたい。大方の御示教をお願いする次第である。

注

- (1) 古筆名葉集の諸版については、伊井春樹・高田信敬「古筆切提要」（昭和五十九年五月 淡交社）に簡にして要を得た解説がある。
- (2) ただし、当該切の極札は筆者を後宇多院ではなく宗祇とする。
- (3) 別府節子「松木切の考察」（出光美術館研究紀要第三号 平成九年九月）
- (4) 石澤一志「伝後宇多天皇筆「松木切」へ「兼行集」断簡」について——その原本性と現存諸本との関係——」（和歌文学研究第七十六号 平成十年六月）
- (5) 伊井春樹「伝後醍醐天皇筆吉野切考——「堀河百首」初撰本としての性格——」（語文第四七輯 昭和六十一年四月）
- (6) 小松茂美「古筆学大成」第十六卷（平成二年六月 講談社）
- (7) 池屋和也「原・統古今集」の痕跡を求めて——古筆切資料の再検討——」（上）（中京国文学第十号 平成三年三月）、同「原・統古今集」の痕跡を求めて——真観撰「八代和歌抄」について——」（下）（中京国文学第十一号 平成四年）

月三月)

- (8) 藤井隆・田中登「統国文学古筆切入門」(平成元年四月
和泉書院)
- (9) 出光美術館蔵品図録「世」(平成四年七月 平凡社)所収。
- (10) 注(6)に同じ。
- (11) 田中登「古筆切の国文学的研究」(平成九年九月 風間書
房)第四章第二節参照。
- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 藤井隆・田中登「国文学古筆切入門」(昭和六十年二月
和泉書院)
- (14) 細川家永青文庫叢刊・別刊「手鑑」(昭和六十年二月 汲
古書院)
- (15) 久保田淳「たかまつ帖」(平成二年八月 貴重本刊行会)
- (16) 小野恭靖「中世歌謡の文学的研究」(平成八年二月 笠間
書院)
- (17) 「あけほの」所収の畠山切は詩と歌との間に料紙の継目が
あり、その継目を境に雲形の模様は断絶が見られるので、
この詩と歌とは本来の順序のままではなく、新たに貼り合
わせされたものである。
- (18) 注(15)に同じ。
- (19) もっとも、堀川氏は「たかまつ帖」刊行直前に出た「大
慈八景詩歌」について(「国語と国文学平成二年六月号」)
と題する論文で、畠山切が大慈八景詩歌を書写したもので
ある旨指摘されている。
- (20) 田中登「八代集部類抄から二八明題集——付、二八要抄の
古写断簡——」(講座平安文学論究第五輯 昭和六十三年
十月 風間書房)
- (21) 注(6)に同じ。
- (22) 藤井隆「鎌倉時代書写和歌古筆切管見」(愛知大学国文学
第十七号 昭和五十二年三月)
- (23) 田中登「拾玉集以前の慈円家集」(青須我波良第27号 昭
和五十九年六月)
- (24) 注意(11)の拙著第五章第四節参照。
- (25) 久保田哲夫「平安時代私家集の研究」(昭和六十年十二月
笠間書院)第二章参照。
- (26) 注(25)に同じ。
- (27) 岩佐美代子「嘉元元年伏見院三十首歌考——新資料紹介と
歌人別集成——」(鶴見大学紀要第27号 平成二年三月)
- (28) 三村晃功「伏見院三十首」歌をめぐって——中世散佚歌
集の整理——(中世文学研究第2号 昭和五十一年七月)

- (29) 別府節子「嘉元元年伏見院三十首」の新資料と考察（和歌文学研究第六十三号 平成三年十一月）、同「嘉元元年伏見院三十首歌」について——新資料と資料集成——（リポート笠間第32号 平成三年十一月）
- (30) 久曾神昇「私撰集と古写断簡の意義」（国語と国文学昭和四十六年四月号）
- (31) 「新編国歌大観」第六卷（昭和六十三年四月 角川書房）
- (32) 小林強「中世古筆切点描——架蔵資料の紹介——」（仏教文化研究所紀要第三六集 平成九年十一月）
- (33) 注（11）の拙著第二章第三節参照。
- (34) 冷泉家時雨亭叢書7「平安中世私撰集」（平成五年八月 朝日新聞社）、同34「中世私撰集」（平成八年六月 朝日新聞社）
- (35) 杉谷寿郎「撰句抄切」（和歌史研究会会報第86・87・88合併号 昭和六十年十月）
- (36) 注（11）の拙著第三章第二節参照。
- (37) 注（30）に同じ。
- (38) 池田和臣「国文学古筆切資料拾遺」（中央大学文学部紀要第77号 平成八年五月）
- (39) 注（11）の拙著第三章第一節参照。
- (40) 高田信敬「雲葉集」と「藤葉集」（日本古典文学会々報第102号 昭和五十九年六月）
- (41) 伊井春樹「雲葉和歌集切拾遺」（本文研究第2集 平成十年三月）
- (42) 注（38）に同じ。
- (43) 注（30）に同じ。
- (44) 注（11）の拙著第二章第六節参照。
- 〔付記〕本稿は平成九年度関西大学文学部共同研究費による研究成果の一部である。
- （たなか のぼる／本学教授）